

日本科学哲学会 第41回(2008年)大会
シンポジウム「脳科学と社会」

「道徳の脳科学研究と科学哲学」

立花 幸司

東京大学大学院総合文化研究科
日本学術振興会特別研究員(DC2)

脳科学と社会の関係を考察する際、科学哲学が利用することのできるアプローチ方法は様々である。たとえば、脳科学の知見が社会に投入された際の倫理的・法的・社会的問題(ELSI; Ethical, Legal, and Social Issues/Implications)を考察することができる(狭義の「脳神経倫理学(neuroethics)」)。また、今後の脳科学研究の方向性と社会との調和を図り、相互の良好な関係を構築するためのガバナンスを考察することもできる。学問領域としては、前者は生命倫理学と近い位置にあり、後者は政治学や科学技術社会論(STS)と主に関連しているが、科学哲学もまたそれぞれの分野で活躍していることはよく知られている。

このように、脳科学と社会について考察する際、科学哲学が脳神経倫理学やガバナンスに取り組むことはアプローチ方法として現に採用可能である。そして、こうした研究活動は重要なものであり、今後更なる研究が必要とされ、また期待もされる。

しかし、このどちらもが拠って立っている背景がある。それはすなわち、実際の脳科学研究の進捗状況である。現に進行している脳科学研究によって得られている知見と、そこから予想される今後の研究の可能性を背景として、脳神経倫理学やガバナンスはその論を展開することになる。

そこで本発表では、脳科学と社会を考察する際の様々なアプローチ方法への科学哲学の寄与に目を配りつつ、その背景としてある実際の脳科学研究に科学哲学がどのように関わりうるのかを考察する。発表では道徳の脳科学研究を主に取り上げながらこの問題に取り組むことになるが、「倫理の神経科学(neuroscience of ethics)」や「実験哲学(experimental philosophy)」などについても時間の許す限り触れながら、脳科学研究と科学哲学の関係について考えてみたい。